国立東京療養所にて
パウロの回心
――使徒行伝第９章１～19節――

（『愛泉』誌第20号、１９５８年６月10日発行）

１９５７年11月23日
小池辰雄

神に対する熱心　神の熱心　汝ら翻りて幼児の如くならずば　何ぞ我を迫害するか　鱗の如きもの落ちたり　霊魂の方向転換　御霊のキリストと一つになる

【使徒行伝９】

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝（おびやかし）と殺害との気を充（みた）し、大祭司にいたりて、2ダマスコにある諸教会への添書（そえぶみ）を請（こ）う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳（ひ）かん為なり。3往きてダマスコに近づきたるとき、忽（たちま）ち天より光いでて、彼を環（めぐ）り照らしたれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。6起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』7同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。8サウロ地より起きて目をあけたれど何も見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、9三日のあいだ見えず、また飲食（のみくい）せざりき。

10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影（まぼろし）のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直（すぐ）という街（ちまた）にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。12又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按（お）くを見たり』13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就（つ）きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処（ここ）にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難（くるしみ）を受くるかを示さん』17ここにアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途（みち）にて現れ給いしイエス、われを遣（つかわ）し給えり。なんじが再び見ること

を得、かつ聖霊にて満たされん為なり』[18]**直ちに彼の目より鱗（うろこ）のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、**[19]**かつ食事して力づきたり。**

（使徒行伝22章、26章を同時にお読みください）

●神に対する熱心

22章の3節に、

「神に対して熱心なりき」

とありますが、この語は良く覚えていてください。正直、サウロは神に対して熱心でした。即ち、ガマリエルの門下でして、ユダヤの律法を拳々服膺（けんけんふくよう）し、

「律法（おきて）の義については責むべきところなし」

と自ら言うことができるほどに、彼は道徳的チャンピオンでした。これはピリピ書をお読みになれば書いてあります。

「[4]**されど我は肉にも恃（たの）むことを得るなり。もし他の人、肉に恃むところありと思わば、我は更に恃む所あり」**（ピリピ３・４）

と。律法について厳格なる派に属する人で、彼は自分の従来の義というものに、もし誇るならば誇るだけの事がいえるのであって、血統からいっても、それから道徳的、宗教的、修養の面からいっても、彼は決して非難さるべき人ではなかった。

パウロは一面、体の方には欠陥があったようでした。頑健というような体ではなかったようです。しかし意志力の強い、また少しわるい角度からいうと「我（が）」の強いひとであったようです。これが、この新しいキリストを信じ、彼の復活、甦りを信じている弟子たちを迫害してかかってきたのです。その最初の殉教者はこの前に学んだステパノの事態です。

しかしながら、このステパノはサウロおよび迫害する者たちに石で打たれながら、

「主イエスよ、我が霊を受け給え」

と。また跪（ひざまず）きて大声に、

「主よ、この罪を彼らに負わせ給うな」

と叫んで死んだ。

サウロはなおこれを肯定していた。その目撃者の一人であった。パウロの回心にはそういう前提もあるのです。このサウロの回心の事態、これを近代的な人たちは、その心理的なサイコロジカルな面に重きをおき、超自然的な事態に対しては目をつぶって、それを余り重んじないでいます。それは事態を取り損なっているからです。

また一面において、非常に超自然的な事実だけに目を向けて、そしてパウロの内心の事態に対して全然関心を持たないという角度も行き過ぎです。

超自然的なキリストがここに臨んできたという事態と、パウロが心のうちにおいて何か

非常に彼自身がまだ気がつかなくて、何かひとつの問題を持っていた。そういったものとがここにちょうど内外相即してきた。しかし、相即すると申しても、この啓示的な事態がイニシアティブ（主導権）を持っているのです。キリストが自らパウロに出会うことなくしてパウロの回心はなかった。このことは、はっきり我々は認識しなければならないのです。

●神の熱心

**3往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照らし
たれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という
声をきく。5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害す
るイエスなり。**

ダマスコに近づいた時に、忽ち天より光出でて彼をめぐり照らした。彼および彼の回りの者たちをめぐり照らしたということは、この三つの記事（9章、22章、26章）が同じように言っています。その声を聞いたとか、どういう声がしたとか、ということにおいてはそれぞれまちまちでありましても。

要するに、太陽の光よりもなお素晴らしい光と、パウロが告白しているように、何か超自然現象をきっかけとしたのです。正に霊的な啓示が御霊の光の現象としてキリストが迫ってきた。このことがどうしてもはっきりと受けとられなければならない。これは創世記から黙示録に至るまで聖書の現実が、非常に深い現実で我々に迫り、それが時々まったく我々の予想しない事態としてそこに現象してくるのです。

旧約の最大の預言者といわれたモーセがそうでした。出エジプト記の3章をご覧ください。ここに超自然現象がはっきりと書いてある。そして、神が自ら何と申すかというと、

「我は在りて在る者なり」

と。いつも申し上げているように、私はこれを、

「我は在りて在らしむる者なり」

と訳したい。神自らが、我々すべて森羅万象を、人類を在らしめているところのもの、我々を在らしめているところの者が自ら現れて、モーセを立てて預言者となして、律法を与えたのです。預言者エリヤの事態がそうでした。

また、アモスがそうでした。アモス書の7章14節、

**「14アモス対えてアマジヤに言いけるは、我は預言者にあらず、また預言者の
子にも非ず、我は牧者なり、桑の樹を作る者なりと。15然るにエホバ羊に従
う所より我を取り往きて、我が民イスラエルに預言せよとエホバわれに宣え
り」（アモス7・14～15）**

いわゆる職業的預言者ではない。また預言者の預言でもない。桑の木を相手に、また羊を相手にしていた私に、「立って預言せよ」と言われる。知的な血統の何の資格もないもの

を捕えて、「預言せよ」と言われるという。アモス書の3章8節に、

「獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや。主エホバ言語たもう。誰か預言せざらんや」（アモス3・8）

主エホバがものいい給う。主エホバがイニシアティブを持って私に語りかけ給う。

「このことを語れと神が迫り給うのであるから、私は預言せざるを得ない。自分で預言するのではない。預言はせしめられるのである」

と言っています。

ホセアがそうでした。アモスが驚くべき神の審判を預言したそのあとから、審判の神がなお、

「その審判の奥には驚くべき赦しが来ているのだぞ」

と、救い上げるところの愛を持っているということをホセアを通して言わしめたのです。南王国が亡びる時の最終の預言者エレミヤがそうでした。エレミヤ記の1章8節に、

「なんじ彼等の面を畏るる勿れ、そはわれ汝と偕にありて汝をすくうべければなりと、エホバいいたまえり」（エレミヤ1・8）

これは行動的にも、言動にも、どっちにも神さまがイニシアティブをとってエレミヤをひっぱり回したのです。

パウロは律法に非常に忠実でありましたが、預言者のことも知らなかったはずはない。そういったことがパウロにとって一つの問題となったのかも知れません。

「われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり、汝が胎をいでざりし先に汝を聖め、汝をたてて万国の預言者となせりと」（エレミヤ1・5）

なんていうことは、普通の判断にては解らない。キリストは、

「我はアブラハムより先に在りしなり」（ヨハネ8・58）

と言われた。私たちの存在というものは、神の意志のうちに深く備えられてあった。私たちがこのように福音にぶつかって――聖書の預言者たち及び使徒たちがじかじかにエホバにとらわれ、キリストに捕えられた、そのような角度の福音の中に――

「原始福音」

と私が表現しているその福音の中に、聖書が水を割らずに言っているところの事態の中に、今、私たちは捉えられつつあるのです。私たちの熱心が斯くなしたのではない。私たちは、

「神の熱心によって」

なのであって、神に対する熱心ではない。

「神の熱心、キリストの熱心によって」

キリストの意志がかく私たちを捉えつつあり給う。何か自分たちがとうとうこういうところに結論がきたといって、私たち自身が原始福音というものを捉えだしたようにもし思ったならば、それは間違いです。

●汝ら翻りて幼児の如くならずば

生まれつきの人間が自分で探し求めて、そして自分の思索の結論として、

「どうしてもキリストというものがなくてはならない。そして、贖罪というものがなくてはならない」

といった結論になって、誰がキリスト教にきたか。思索では

「絶対唯一の神」

くらいまでは来るでしょう。しかし、どんなに素晴らしい神観をそこにでっち上げましても――アリストテレス、プラトンも素晴らしいです――けれども、アリストテレスもプラトンにも、このパウロやヨハネに臨んできたような驚くべき生命はない。この驚くべき生命の真理は、人間の側からは出てこないのです。

キリスト自身は真理の光です。また生命を与える生命の源泉でありますから、これにぶつかって私たちは初めて目が覚めるのです。ヨハネ伝１章のナタナエルのように、また４章のサマリヤの女のように、目覚めるという事態はどういうことであっても、私たちが自分で捜して目が覚めるのではありません。神さまによって光を当てられて、目が覚めるのです。声をかけられて耳があいてくる。

こういうわけでして、如何にパウロが素晴らしくても、彼自身が自分の信仰をもって、自分の確信をもって進んでいる限りは、いよいよ救い難きところに行くのです。どんなに人間の素晴らしさは、人間の才能が素晴らしくても、それ自身では実はどうにもならない。キリストは、

「素晴らしいのは神さまだけだ」

と仰る。けれども、神さまは素晴らしいなぁとキリストは傍観して言っているのではありません。キリストはまともに神に向かって、神の素晴らしさを百％受けられました。そうしたならば、月が反射して光るぐらいのものではない。キリストは月ではない。驚くべき神の光が浸透した光です。

お釈迦様は悟ったかも知れません。迷いから悟りにきた。キリストは始めから迷わない。彼は始めから開けっ放しです。しかし彼は迷わないからといって、ぼやぼやしていたのではない。彼は祈った。父なる霊なる神に祈った。祈るとは即ち神を受けとることですから。キリストは百％、神を受けとった。ですから、幼児の如くなって神を受けとれたのです。マタイ伝18章に、

「まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻（ひるがえ）りて幼児（おさなご）の如くならずば、天国に入るを得じ」（マタイ18・3）

ここに「翻（ひるがえ）りて」とあります。この「翻りて」をしっかり捉えてください。人間はなかなか翻らない。キリストはまさに翻り翻りして幼児の如くなったのです。

私が常に申し上げているように、これは彼自身の告白ですよ。単なる教えではありません。

教訓なんかを言っているのではない。キリストは自分の全身をもって体験したことを告白しておられる。それをただ教えとして聞くだけではダメなんです。

キリストは、「翻りて」と申されました。ところが、これは不可能です。私たちは瞬間的には翻ることもあるかも知れないけれども、本当には翻って幼児の如くなれない。列王紀略上の18章に、

「エホバよ、我に応えたまえ、応えたまえ。此民をして汝エホバは神なること
および汝は彼等の心を翻したもうということを知らしめたまえ」（列王紀略上
18・37）

「エホバは汝らの心を翻す神なり」

というのです。そのエリヤが示された語は非常に大事な言です。

同じような角度の言がエレミヤ記にもある。31章18節に、

「18……エホバよ、汝はわが神なれば我を牽転したまえ、然ば我転るべし。
19われ転りし後に悔い、教えを承しのちに我髀を撃つ……」（エレミヤ31・18～
19）

「神さま、貴神が私を転させてください」

と。この「転す」というヘブライ語の字は、ギリシア語でいう「メタノイヤ」という字と同じで、「転換」という字です。

「貴神が私たちの方向転換をさせてください。そうすれば私たちは方向転換をします」

という。いいですか。

「どうも悪い事をして済みません」

といって、悔いてから回心するのではないのです。それは人間の心の働きはいろいろですよ。悔いるという事もあるでしょう。けれども、本当に

「悔い改め」

ということは、神さまの力がこなければできない。本当の方向転換というものは、キリストが向きを換えさせてくださらなければ、私たちにはできないのです。

パウロはダマスコ途上において、

「たちまち天より光がきて彼をめぐらし」

と。これはさきほどから申し上げているように、神さまの側からの超自然的な事態です。

「この頃はどうも起きない。昔はそうだったかも知れないが、まぁしょうがない」

と、この頃の基督教は、

「そういったことは抜きにしてよろしいのであろう」

ということが大体の判断です。そういうことをやっているから、基督教の福音の力がだんだん薄くなってきてしまった。そして、驚くべき原始力、キリストの聖書においてやって

きたところの始めの力が非常に失せてきた。ところが、このキリストの原始力は時間空間を超越して、いや更にこの時間の中に、この歴史の中にいよいよ激しく入ってきて、いよいよ素晴らしく顕れようとしているのです。

●何ぞ我を迫害するか

ところで、パウロが熱心であったということ、真剣であったということは、大いに買わねばダメです。どんなにそれが間違っていましても、それがいい加減であることよりも、神さまがその神に対する熱心をそのまま使わないで、

「神からくるところの熱心」

にこれを変えてしまうのです。質的に変えてしまう。この男は熱心であるけれども、とんでもない間違いをしている。これをひとつ使って、本当に神からくるところの熱心に、神による熱心にして、初めて神のための熱心にしてしまう。そういう熱心に変えてやろうというのです。

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

と、今もなおキリストの言葉は20世紀のこの私たちに現実に響いてくるのです、人々には聞こえないけれども。

いったい、「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」とはどういうことか。サウロはキリストを信じたところの弟子たちを迫害していた。そしたら、キリストは

「我を信じている者を迫害するのか」

とは言わないで、

「なぜ我を迫害するのか」

と言われた。これはマタイ伝18章5節に、

「また我が名のために、かくの如き一人の幼児（おさなご）を受くる者は、我を受くるなり」

とありますように、

「名も無きキリスト者、私を信じている者を受けない者は私を受けないのだ、迫害する者は私を迫害するのだ」

というように通ずるわけです。

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

という、この十字架のキリストの叫びが、しかし光をもってパウロを打っている。この力は復活のキリストの力です。ですから、私はこの事態において復活の生命のキリストを見る。即ち、十字架のキリストと復活のキリストとはこのパウロに現れてきた。これは言い換えるならば、いつも復活のキリストは十字架のキリストを自分の身のうちに持っておられるのです。

3 **往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち（たちま）天より光いでて、彼を環（めぐ）り照らし**

たれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。

という、このところに驚くべき生命力、驚くべき聖なる愛の力、生命を持ったキリストを見ると同時に、その復活のキリストに彼は倒されて、地に倒れてみたならば、この「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声を聞いたのです。

●鱗の如きもの落ちたり

5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。6起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』

と。この「べし」も非常に強い「べし」です。それでアナニヤという人がすでにこの幻のうちに示されていて、

10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直という街にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。12又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按くを見たり』

と、そういう示しが既に来ているのです。即ち、アナニヤに按手されている。

13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』

アナニヤも主が幻にて言い給うことが不思議でしようがなかったのです。あのイエスを迫害する者に何で手を按く必要があるだろうか。

「この人はこれこれの人ではありませんか」

と。そうした時に主は言い給うた。

15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』17ここにアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途にて現れ給いしイエス、われを遣し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』18直ちに彼の目より鱗のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、19かつ食事して力づきたり。

この前の前の武蔵野幕屋の集会で、私はパウロのテモテ前書1章の、

「我れは罪びとの首なり」

ということを主題にして集会をしたのですが、その集会に列席したある方から手紙がきま

した。

「いつも変わることなき主イエス様の聖名を心より感謝し、讃美し、ハレルヤと叫びます。10日、17日と本当にめぐまれた集会に出席させていただき、どんなに感謝してよいかわかりません。今度の上京は主にあって恵みの連続でありました。「我れは罪びとの首なり」で、私は首が落っこちたと思うほどの強烈なショックに近いほどの感動を受けました。なにか「がたん」と大音響がしたような気がしたのです。私の魂がイエスの十字架の前にあまりに大きな愛にびっくりして転げ出したのです。はなはだおかしな表現ですけれども、本当にそんなようにしか言い表わせません。パウロが目から鱗の如きものが落ちたとの御言がしみじみと身にしみた如くに思われました……」

と。こういうわけでありまして、私たちは、いつどこだか知らないけれども、サウロがこの十字架・復活のキリストに出っくわしたように、私たち一人ひとりが本当にパウロと同じようにキリストにぶつかって「鱗の如きもの落ちたり」ということになる。

「いったい『鱗の如きもの落ちたり』とはどんなことだろうか？」

と、普通の人はこういうことを聞いて、いろんな憶測をしてもダメです。いくら研究書を読んで、いくら説明をきいてもダメです。「鱗の如きもの落ちたり」とは、これは百万言を費やして説明してもダメなのです。これは自分でそのような事態にぶつからなければ、

「パウロの『目より鱗の如きもの落ちたり』、然り、アーメン」

ということが言えないのです。

●霊魂の方向転換

福音の真理というものは、こういったものでありまして、自分でこれを味わい、倒されるまでは、これは掴めない。私はいま皆さんとこうやって使徒行伝9章を学びつつありますが、パウロは未だ福音の門口ですよ。パウロはこれから深く荒野に出でて瞑想し、祈り、十字架のキリスト、復活のキリストというものについて、深く全身をもって内在的に受けとることによって、初めて立ち上がって伝道に行ったのです。パウロはこの回心にぶつかったのは、大体30歳前後でありますから、紀元33年位の頃でありましょう。

彼は自分を

「土の器」

と、壊れやすい土の器だと言った。彼は実際、壊れやすい人なんです。けれども、この器は海を渡って行っても沈まない。どんなに嵐にあっても、彼は難破しても、それでも彼は神の力によって助けられつつ、彼の仕事が終るまでは、神が

「殉教の死を遂げよ」

とおっしゃるまでは、彼は突っ走った。あのコリント後書11章に書いてあるような驚くべき苦難を彼は突破して行った。あの、私たちが創造に絶するような苦難を彼は受けた。だ

から、

「キリストの御名のために苦しみを受ける」

と記されている通りなのです。

「16 **我かれに我が名のために如何に多くの苦難（くるしみ）を受くるかを示さん」（ロマ９・16）**

と。しかし彼は、

「その苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず」（ロマ８・18）

と言った。即ち彼は、

「受くべき栄光に比ぶべきもあらず」

となぜ言えたかというと、彼は苦しみをやせ我慢しているのではない。彼は苦難の中に驚くべき祝福と、力と、喜びとを与えられている。だから、

「常に喜べ、喜べ」

と言っている。このキリストの生命が来たらば、どんな環境、運命、事態になりましても、遂に闇を光に変えつつ、即ち天国をその回りに現わしつつ、燈台の如くそこに光を与えつつ、辺りを明るく照らし、暖かにしながら進んで行きます。これが即ちパウロの回心です。

「回心」

というのは、ただ心の回転をしたくらいのことで、回心なんていう言葉は本当はあまりあてはまらない。まぁひっくり返る心ですから、一応は結構ですけれどもね。私たちの中に回心というのは、

「私たちが何か回心した」

なんて、とんでもないのです。私たちは心と魂の質を、霊魂（たましい）の方向転換をさせられた。これはさせられたのです。神の業なのです。その時は解らないかもしれない。けれども、方向転換、変質変貌ということを、とにかく神さまはイニシアティブをとってなし給う。これはさきほどのモーセにおいて然り、エリヤにおいて然り、アモスにおいて然り、ホセアにおいて、あの預言者たちにおいてみな然りです。

この使徒たちもこのようにして回心せしめられた。変質変貌させられたのです。私たちに有無を言わせず、復活のキリストが入っている。私たちがキリストにぶつかって、

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するのか。我になにゆえ逆らうのか」

という。私はこの声によって、その声の下にぶっ倒されてみたらば、その声は十字架のキリストの声であった。私は如何なる自分の過去・現在・未来にわたってどんなことであろうと、

「自分は神に救われていたということを十字架において受けとる」

と、初めて本当に悔い改めが始まるのです。

キリストがやってくださるから、私は本当にそうすると、どうですか、もう自分なんていう者は捨てられてあるから――もちろん私はダメですが――ダメな私は考えない。しかしながら、現実にはどこまでも、

「神さま、すみません」

というわけで進んで行くのです。しかし、

「赦してもらう必要のない自分になろう」

なんて、それはダメですよ。ときどき人間というものは、そのように思う。クリスチャンは神さまの前に赦してもらう必要のない者になろうと思うけれども、そうしたならふさぎますよ、信仰がいい加減に疲れてしまうから、止めてしまいますよ。

「私はすでに救われていたことをキリストの十字架で受けとる」

キリストの生命によって推進されていくことと、悔い改めていくことは相反（あい）しない。キリストの光を受ければ受けるほど、暗さが映ってくる。キリストの光、生命がわがうちに浸透すればするほど、我というこの中にうつってくる。それでいよいよ悔改め悔改めということが反って積極的な転換ということになる。そのようにして私たちは本当に喜ばしいキリストの中に捉えられるのです。

●御霊のキリストと一つになる

「キリストの愛から私たちを離れしめる何ものがあるか」（ロマ８・35）

と、パウロが絶叫している通り、パウロの信仰はダイスマンも言っている通り、この自分からのではなくして、キリストがぶつかって来たものですから、反動して――「反動」とはアクションがくるから――

「リアクション」

となって、これは進んで行く。そしてキリストが、御霊のキリストが入って来たから、キリストと一つになるのであります。

しかし、ただ融合してしまって、ただ茫然としてしまうような神秘ではない。彼の神秘は神秘だけれども、これはキリストと我とは、はっきり分かたれている。分かたれているけれども、それは本当に

「コンムニヨ」（Communio 共有、交流、交わり、親交）

といいまして、本当に兄弟的な「コンムニヨ」となって、兄弟的な意識となって、そして、キリストは我がうちに主人公となって進んでいらっしゃるのです。

そういった神秘的にして、また真に実存的な、最も深い意味において倫理的な、そういった角度の構造がパウロの福音構造でありますから、パウロはいわゆる神秘家のように浮いてもいなければ、またいわゆる倫理的なものに凝り固まったパリサイ的なものでもなければ、実に本当の意味における健全な福音をパウロは展開しているのです。

とても今、パウロの構造をここで説明しきれませんから、しませんけれども、パウロの書簡を読めば、この多面性、驚くべき

「有機体的構造」

というものが、どんなに支障があっても、どんな宗教的な事態があってもなお、突っ走ってこの福音が勝って行く。まさにパウロはキリストから選びの器として選ばれたのです。彼の驚くべき今までの智慧も道徳的な実存も、一度ひっくり返されて、驚くべき構造のうちに使われ始めた。これがパウロの有機体的な構造をもっているところの信仰の事態なんです。

大切なことは、十字架・復活のキリストのうちに自分が深く捉えられて、それを深く、右顧左眄することなしに、祈りの世界で受けとり、そして御霊の事態がいよいよ内在的になって展開して行くことです。堅苦しくなく、有機体的構造のうちに、聖書は循環円環のうちに、それらの言がずっと貫いて行って、読めるようになるのです。

どうか、それを土台として第一歩としてパウロが如何にダマスコ途上において徹底的にひっくり返されたか。私たちはどこかでいつか、このダマスコ途上のパウロの如き受け方をしなければならない。現象的にこのような不思議なことが起きなくてもいい。それは質的には同じ質のものが次第に来るのです。

一回ではなくして、二回、三回というように来るかもしれない。いずれにしても、私たちがこのようにキリストとどこかで出くわし、どこかでキリストの顕現の声に本当に耳を開かねばなりません。また私たちがこの集会において、ただ聖書を研究しているのではなくて、例えばパウロと一緒にこの使徒行伝９章を読めば、ダマスコ途上のこの経験の中に質的に今日入るという事態でなければならないわけです。

いや実に、私はそれぞれの意味においてこの文字を受けとられたと信ずるのであります。

「汝らは死にたる者にしてその生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり」（コロサイ３・３）

＊　　＊　　＊

愛する兄弟姉妹よ、若葉の季節も過ぎて雨期に入ったようですが、いかがお過ごしですか。我らの小さき群、心からお伺い申し上げます。この「パウロの回心」号をお届けできたことを喜びます。この世の境遇が如何なる状（さま）であろうとも、あらゆる患難に勝利してなお余りある主の恩恵と平安が我らに溢るることを父の神に感謝いたします。